

豊かな心を育てる幼稚園を目指して

－自然環境を生かした工夫と援助を通して－

南風原町立北丘幼稚園教頭 赤 嶺 律 子

内容要約

豊かな心を育てるために、園内の自然環境に幼児が興味や関心を持ってかかわれるように環境構成を工夫し、全教師が協力してチーム保育を試みた。実践では全教師がチームを組み、園の自然に存分にかかわれる「たんけんごっこ」を試みた。その結果、ほとんどの幼児が園の自然に直接触れながら、驚きや喜び、好奇心、感動等を教師や友達と共感することで豊かな心の芽生えにつながった。また、幼児が担任だけでなく他の教師にも親しみをもってかかわる姿が見られた。

【キーワード】 自然体験 チーム保育 自然環境の工夫 自然の年間計画

目 次

I	テーマ設定の理由	11
II	研究の視点	11
III	研究内容	12
1	豊かな心とは	12
2	自然環境にかかわって育つ「豊かな心とは」	12
3	自然体験とは	12
4	自然環境にかかわりをもつことで期待できる教育的効果	12
5	教師の援助の工夫	13
6	チーム保育の実践に向けて	13
7	自然環境を生かす年間計画作成にあたっての工夫点	13
8	自然環境を生かす年間計画	14
IV	保育実践	
1	活動名	15
2	活動設定の理由	15
3	保育の目標	15
4	保育の視点	15
5	自然環境の工夫	15
6	活動の計画	15
7	本時の保育展開	16
8	活動事例	17
9	保育の省察	18
V	研究の成果と課題	20
1	成果	20
2	研究の課題	20

＜幼稚園教育＞

豊かな心を育てる幼稚園を目指して

－ 自然環境を生かした工夫と援助を通して－

南風原町立北丘幼稚園教頭 赤 嶺 律 子

I テーマ設定の理由

近年、幼児を取り巻く社会は少子化、核家族化、都市化、情報化、自然環境や遊び場の減少など著しく変化している。そのような社会状況の変化に伴い、戸外で身近な自然に触れて遊ぶことや、地域の子も同士のかかわりが希薄になり、多様な感情体験を味わう機会が少なくなってきたと言われている。幼稚園教育要領に「自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること」と目標の一つに述べられている。幼児が自然に主体的にかかわり、そこで得た感動を教師や友だちと伝え合い共感し合うことで、豊かな心情や思考力の芽生えが培われていき、身近な環境を大事にしようとする心も育まれていくと考える。

本園の幼児は家庭ではテレビ、ビデオ、テレビゲーム、既製のおもちゃで遊び、戸外で友だち同士で身近な自然に触れて遊ぶことが少ない。その為に戸外で遊びたがらない幼児がいる。本園は自然が豊かで幼児が興味や関心をもってかかわれる砂場、池、忍者の森、菜園がある。また、ニワトリやウサギと関われる飼育小屋等が整えられているが、愛情をもって自然環境を活用する姿に課題がある。

そのことは教育計画の中に、自然環境についての意図的な位置づけの不十分さや、時間や場所など十分保証することができず、幼児の活動が中断されたり興味が薄らぐ場面も見られた。また、オタマジャクシやヤゴを捕るだけで満足しバケツをそのまま池の側に放置したり、蛭やバッタを捕って虫かごをそのまま園庭に置きっぱなしにすること等、基本的な生活習慣の形成にも影響を及ぼしている。幼児の興味や関心は多様であるため、教師は並行して様々な活動をしている幼児を同時に援助していかなければならない。そのため、一人の教師では適切な援助をすることが困難であったからだと思う。そのことから、全職員で幼児一人一人を育てていく視点にたつ教育が大切だと考えた。

そこで、教師同士が協力して一人一人をとらえて、適切な援助をしていく為のチーム保育を取り入れることが望ましいと思われる。教師は意図性・計画性を持ち、幼児が五感を通して驚きや発見、疑問から興味や関心を深め身近な自然とかかわり豊かな体験を繰り返し経験できるように自然の年間指導計画を見直し、一人一人の内面理解に努めながら自然環境を生かした環境構成や援助の工夫を図り、豊かな心を育みたいと考え本テーマを設定した。

II 研究の視点

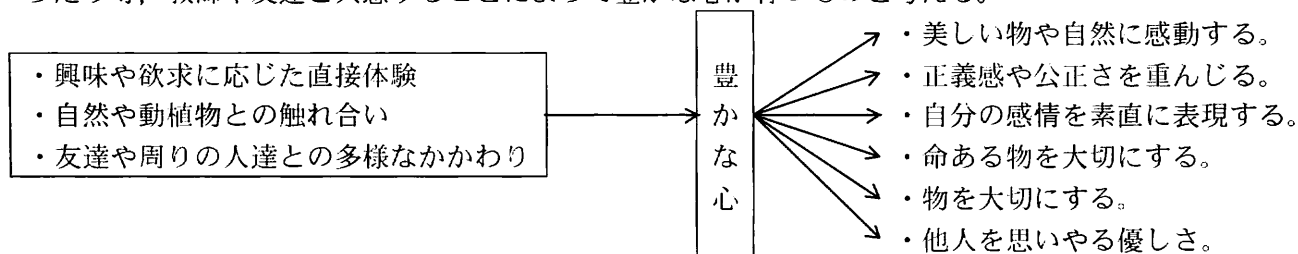
- ・ 自然環境の年間活動計画を工夫改善し、自然環境を生かした環境構成や援助の在り方を探る。
- ・ 全職員で幼児一人一人を援助し、身近な自然とふれあう中で、心を動かされたことをありのままに受け止め、豊かな心が育つ過程を明らかにする。

Ⅲ 研究内容

1 豊かな心とは

豊かな心は、幼児が生活する中で、温かい人間関係を基盤にして培われていく。

さらに、幼児期に身近な自然環境とのかかわりを通して、直接体験を積み重ね、感動したり、疑問を持ったり等、教師や友達と共感することによって豊かな心が育つものとする。



2 自然環境にかかわって育つ「豊かな心とは」

- (1) 自然の不思議さや美しさに感動する心
- (2) 身近な自然現象に興味をもち、試してみようとする意欲
- (3) 解放感を味わう中での情緒の安定
- (4) 飼育物の世話を責任をもって頑張ろうとする心
- (5) 遊具の使い方、命の大切さを考えていける心
- (6) 愛情をもって人や物にかかわろうとする心
- (7) 相手の気持ちに気づき、相手を思いやる心
- (8) 自然の営みに疑問を持つ中での、好奇心や探求心の芽生え
- (9) 自分ではどうにもならない自然の偉大さを感じる中での自己統制力の芽生え

3 自然体験とは

自然とかかわり、見たり、触れたり、感じたり、疑問を持ったり、自然の不思議さに感動することを、五感を使って体験することであると捉えた。

4 自然環境にかかわりをもつことで期待できる教育的効果

(1) 草花にかかわることで

見たり、採ったり、集めたりしてそのものがもつ特性に美しいと気づいたり発見したりしていろいろな遊びに使ったり、作ったりすることができる。

(2) 土・砂・水にかかわることで

心の解放感や情緒が安定すると共にこれらを使って遊ぶ中で、感触を楽しんだり、何かを作ることを楽しむことができる。又、疑問を持ったり試したり探求したりしていくことで好奇心や探求心を育てることができる。

(3) 虫や飼育物にかかわることで

幼児期の生き物とのかかわりにとって大事な感じ方に、アニミズムがある。これは動物にも人間と同じような感情や行動力があると信じている現象である。小動物と継続的にかわることで、不思議さや美しさに感動したり、特性に気づいたり、誕生や死に出会うことで喜びや悲しみ 思いやりの気持ちや命の大切さを知ることができる。

(4) 野菜の栽培を通して

幼児にとって特に関心の深い食生活に関連している。自分達で世話して育てた物を、収穫して食べたり、飼育動物の餌にしたり、飾ったりして、幼児の生活に取り入れるという経験は幼児の生活を豊かにする。

(5) 樹木にかかわることで

花や葉っぱ、虫や鳥、木陰、木の実等との出会いを保証する。また、ちょっとした工夫で、ブランコやターザン遊びが出来る遊具にも変身する。既製の遊具では味わえない自然を楽しむことができる。

また、木登りでは、視界の変化や高所に登れたという満足感や解放感と危険から身を守る緊張感を同時に味わうことができる。このような活動を通して自分が自然の一部であることを愛情と畏敬の念を持って痛感することができる。

(6) 四季の移り変わりや自然現象にかかわる中で

自然の事象の変化に関心をもち、暑い、寒い、涼しい、気持ちいい、安らげる、きれい、におい等五感を通して感じるができる。又、季節によってさまざまな自然や人間の生活にも変化があることに幼児なりに気づくようになる。

5 教師の援助の工夫

- (1) 一人一人の内面を理解し、応答的にかかわっていく。
- (2) 幼児をありのままに受け止め、見守ることにより心が安定するように、受容していく。
- (3) 一人一人に適切なかかわり方をし、良さを発見し自分らしさを発揮することができるように見守り励ます。
- (4) 幼児が感じ表現したことに心を傾け、共感する。
- (5) かかわり方や一人一人に対する幼児理解について、他の職員の意見も聞き幼児の変容を知り、育っていく姿を共通理解する。
- (6) 具体的に示唆したり、新しい教材を提示したりしながら、総合的な視野で援助する。

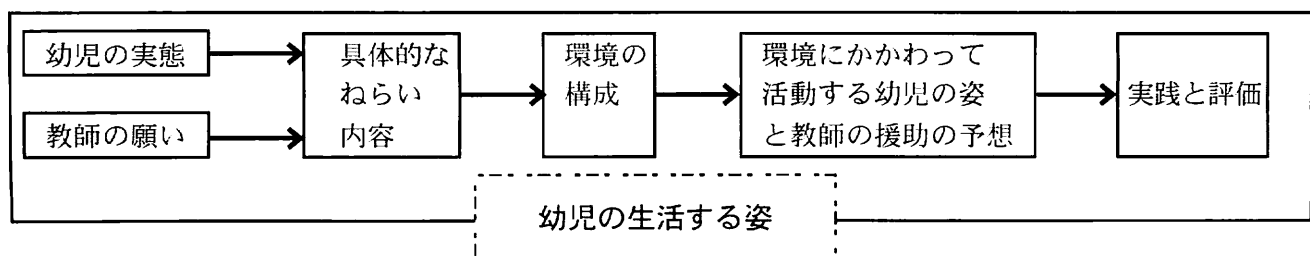
6 ティーム保育の実践に向けて

幼児は安定してくるとクラスへのこだわりをこえて活動を広げていく。特に自然環境とかかわる遊びの場面では、幼児はクラスの枠をこえて入り交じって遊んでいる姿が多く見られる。保育の基本である「幼児の環境への主体的なかかわり」を重視した保育を展開すると、幼児は様々な活動に取り組む。したがって、一人一人の教師だけで保育をすることには限界があり、複数の手と目が必要になってくる。教師がクラス全体の子を把握しようとすればクラス全体の子をおおざっぱに見てしまうきらいがある。逆にある幼児やグループの活動のみにかかわっていると、他の幼児やグループの動きが十分に捉えることができず適切な援助ができなくなる。そこで、本園では全教師が協力し、幼児一人一人を育てるという視点にたち援助をするティーム保育を試みた。そのことは、安全性に加えて、一人一人を見る上でも効果的である。実践にあたっては、次のような教師間の共通理解を図った。

- (1) 一人一人の発達やつまづきを理解し、援助に生かす。
- (2) 幼児の気づき、発見、不思議さ、つぶやきに耳を傾け共感する。
- (3) 教師自身の持ち味を生かしたかかわりを持つ。
- (4) かかわった幼児には、ある程度のめどがつくまで責任をもつ。
- (5) 保育終了後の保育反省をし、次の保育に生かす。(進んで情報提供をする)

7 自然環境を生かす年間計画にあたっての工夫点

- (1) 教育課程を基にして、教育の道筋を見通しながら、幼児の生活を大筋で予測し、その時期に育てたい方向を明確にする。
- (2) 累積された保育記録、資料をもとに実態を予測する。
- (3) ねらい、内容と幼児の生活の両面から自然環境を構成する視点を明確にする。
- (4) 季節など園内の環境の変化を考慮に入れ生活の流れを大筋で予想する。
- (5) 日・週・月の計画の反省、評価などを積み重ね、発達の見通し、ねらい、環境の構成などについて検討し、年間計画の作成に役立てる。



8 自然環境を生かす年間計画

季節の変化や園の自然環境を視野に入れながら、「この時期、子どもたちはどんな所でどんな自然と出会うだろうか、自然環境を生かして豊かな自然体験が得られるような状況をつくりだすためにはどうしたらよいか」を考慮し長期的、継続的視点でかかわれるように年間計画を作成した。

自然環境の年間計画		月											
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
個人栽培	アサガオ	種まき											
	ひまわり	種まき											
花や野菜の栽培	サルビア	蜜を吸う											
	スイトピー	種取り											
草や木	パンジー	幼虫を見つける (つまぐろひょうもんの食草)											
	ペゴニア・ベチュニア	種取り											
小動物	モスローゼ・松葉ぼたん	色水遊び											
	トレニア・バーベナ	種取り											
砂土	キンレンカ	色水・葉っぱで遊ぶ											
	ホウセンカ	色水・幼虫を見つける											
留意点	ジャガイモ	種イモを植える											
	二十日草	種まき											
留意点	ニガウリ	苗を植える											
	ピーマン	苗を植える											
留意点	ナス	苗を植える											
	オクラ	苗を植える											
留意点	カズラ	苗を植える											
	マツ	マツの葉ですもう											
留意点	ホルトノキ	蟬を捕る											
	ユウナ	ままごとにする											
留意点	モモタマナ	木登り											
	ガジュマル	木登り											
留意点	パイヤ	実を食べる											
	ツクサ	色水遊び											
留意点	ハイビスカス・アリアケカズラ	色水											
	ゲットウ	花で遊ぶ											
留意点	オジギソウ	葉に触って遊ぶ											
	タチアワセンダングサ	花びらをならす・ままごとにする・くっつけ遊び・ウサギの餌											
留意点	バナナ・アセローラ・ピロ	収穫 (試食)											
	紫の木	実を食べる											
留意点	シロツメ草・タンポポ・ムラサキカタバミ	花で遊ぶ (ケーキの飾り・冠・プレスレット・ひっぱりこ等)											
	ニワトリ・ウサギ・アヒル	(世話をする・遊ぶ・抱く)											
留意点	ハムスター	(見る・世話をする・観察をする)											
	金魚	餌を与える											
留意点	カメ・サリガニ	餌を与える・触れる・観察をする											
	カバマダラ・ツマグロヒョウモン	卵や幼虫を見つける (成虫になるまでの変化を観察)・・・放す											
留意点	オタマジャクシ・ヤゴ	捕まえる (飼う・観察をする・放す)											
	バッタ・カミキリムシ	(捕まえる・観察・遊ぶ) 放す											
留意点	砂・水	(型ぬき・プリン・団子・ケーキ・山・川・プール・トンネル)											
	土・水	(泥んこ遊び・色水・団子・爆弾)											
留意点	幼児の発達	の姿や他の領域との関連性を十分に把握する。											
	いろいろな種類の草花	を幼児と一緒に育て、十分に遊べるように場の工夫をする。											
留意点	疑問に思ったこと	を自分たちで調べることができるよう、草花や小動物に関する絵本や図鑑を身近に置く。											
	植物の生長や季節的な変化	を捉え、それに気づかせるようにする。											
留意点	幼児が自然と関わる姿	に共感しながら、周りの幼児にもその楽しさや不思議さなどが伝わっていくようにする。											
	幼児が自然と関わる姿	に共感しながら、周りの幼児にもその楽しさや不思議さなどが伝わっていくようにする。											
留意点	それぞれの小動物	にふさわしいかわりができるように環境を工夫する。											
	小動物との触れ合い	を通して命の大切さに気づかせていく。											
留意点	小動物と関わった後	は、手をしっかりと洗うようにする。											
	小動物と関わった後	は、手をしっかりと洗うようにする。											

VI 保育実践

1 活動名

「たんけんごっこ」

2 活動設定の理由

(1) 教材観

身近な自然や生き物は、幼児にとって胸をときめかせ、好奇心をかき立てる魅力一杯の素材や対象であると同時に楽しさを分かち合える友達であったり、温かく見守ってくれる先生でもある。また、小動物と一緒に遊んだり餌を与えたりする体験や季節の草花・野菜を育てる経験を通して生きている物への温かな感情が芽生え命を大切にしようとする豊かな心もはぐくまれると考える。そのことから身近な自然環境が幼児に果たす役割は大変重要と思われる。そこで、全幼児が園内の自然環境に目を向け興味や関心を持って十分関わって遊ぶきっかけになってほしいと思い「たんけんごっこ」を取り上げた。

(2) 幼児観

85 %の幼児は飼育動物（ニワトリ、ウサギ、カメ、ハムスター、キンギョ）に、お腹空いた、朝ご飯だよ、仲良く食べてねと話しかけながら餌や水をやりたり世話をしている。また、自然に興味関心のある 77 %の幼児は園庭にいるバッタやコオロギを夢中になって探し、捕まえた物を誇らしげに見せ、目を輝かせながら喜びや感動を友達や教師に伝えている。草花や木の実を利用した色水遊び、ままごとを楽しんだりする中で不思議さや面白さを発見したり、砂や水の感触を楽しんだりしている。忍者の森では木登り、探検ごっこ、かくれんぼ等を 85 %の子が経験している。しかし、小動物の世話の仕方がわからず大切に扱えずにいる幼児、こわがったり気持ち悪がって触れようとしないう幼児、興味や関心をあまり示さない幼児が 15 %あり課題として捉えている。

(3) 指導観

保育の場で自然環境とは園庭の広さ・樹木や栽培・飼育の設備等をいい、それらは幼児の心を豊かにするための生活の基盤として重要である。自然と関わる中で様々な感動を味わったり、小動物を飼育することにより、命の大切さに気づいたり、思考力や豊かな心、豊かな表現力を培う。そのために十分な時間や場所の保証、楽しい雰囲気づくり等、環境や援助の工夫が大切である。幼児が自然にかかわり心情的・態度が育つような目的をもって環境を整える必要がある。また、全教師が協力して一人一人に適切な援助をしていくことが望ましいと考える。そこで、幼児が本活動において動植物や自然物を見たり、触れたりして感じたことを、友達や教師と共感することで、積極的に自然環境にかかわり豊かな心の芽生えが育つと考える。

3 保育の目標

友達と考えを出し合いながら園内の自然環境に興味や関心をもって取り組み様々な表現を楽しむ。

4 保育の視点

幼児が自然環境に興味や関心を持ってかわり、気づき、発見、不思議さを全職員で受け止め、楽しさを味わわせる援助の工夫を探る。

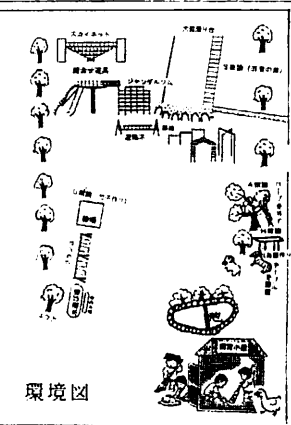
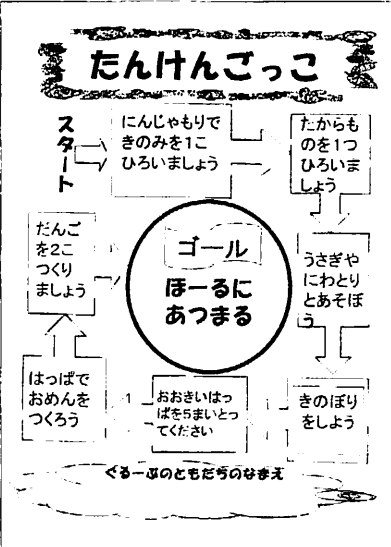
5 自然環境の工夫

- (1) ガジュマルの木に登りやすいようにターザンロープを吊るし、冒険心をくすぐる。
- (2) お面作りの場所にはテーブルやいろいろな素材を用意し幼児なりの工夫をだせるように配慮する。
- (3) 砂だんごを載せるベニヤ板を用意することにより、並べることで数や大小に気づくようにする。
- (4) 飼育小屋の側にウサギの餌にするカズラを植えることにより食卓に気づかせる。
- (5) 四季おりおりの草花を植えることにより、季節の移り変わりを気づかせる。
- (6) 小動物（ウサギ、ニワトリ、アヒル、ザリガニ、ハムスター、カメ）を飼育することにより、世話をしたり、遊んだり、大切に扱うことを知らせる。

6 活動の計画

月 日	ね ら い	幼 児 の 活 動	教 師 の 援 助
1 1 月 1 9 日 (火)	・身近な自然環境にかかわり、自然物を遊びに取り入れようとする。	・ままごと ・飼育動物の世話をする ・忍者の森で「カボッチャマンごっこ」 ・砂遊び (山、トンネル、ダム、川)	・必要に応じて教師も仲間に入り楽しく遊べるようにしたい。 ・飼育当番をする中で扱い方を知らせる。 ・幼児が楽しく遊んでいる姿を見守り励ます。 ・幼児の発想に共感し、適切な素材や用具を提供していく。
1 1 月 2 2 日 (金)	・砂・土・水に触れ感触を楽しむ。 ・友達とたんけんごっこを楽しむ。	・団子作り ・山、川、トンネル作り ・ケーキ、プリン、作り ・「たんけんごっこ」に参加する。 ①まるいはっぱを5まいひろいましょう。 ②にんじやのもりでほそくてながいはっぱをひろいましょう。 ③たからものをひとつさがしましょう。	・安全面に気をつける。 ・砂の感触が味わえるように時間と場所を十分に保証する。 ・裸足で遊ぶので砂場や園庭の安全に気をつける。 ・崩れないだんごが作れるように、柔らかすぎで壊れたときはなぜ壊れたか気づかせるようにする。  
1 1 月 2 6 日 (火)	・動植物にかかわり興味や関心を持つ。	・飼育小屋の掃除をする。 ・餌をあげたり、水をかえたりする。 ・かかわって遊ぶ。 ・ままごと	・世話をする中で扱い方を知らせていく。 ・一人一人の感動やつぶやき、発見を受け止め共感する。 ・草花や木の葉を取り入れて遊べるようにし植物に親しみを持たせたい。
1 1 月 2 7 日 (水) 本時	・友達と協力して課題解決をしながら、自然に触れる楽しさを味わう	・「たんけんごっこ」 ・忍者の森で葉っぱを拾う。 ・木登りをする。 ・砂で団子を作る。 ・飼育小屋で小動物と遊ぶ。 ・大きい葉っぱを5枚とる。 ・大きい葉っぱでお面を作る。 ・宝物を1つ拾いましょう。	・友達と協力して課題解決をしながら自然物に触れる楽しさを味わわせる。  
1 1 月 2 8 日 (木)	・友達と一緒に進んで自然環境に関わって遊ぶ。	・ターザンロープを使って木登りをする。 ・砂や土、水を使ってダム作りをする。 ・草花を摘んでままごと遊びをする。 ・ライダーごっこをする。	・安全面に気をつける。(自分の腕より細い枝には登らないように声がけをする) ・気づきや発見に共感する。 ・お互いの考えを出し合いながら共通のイメージを持って遊びが進められるように言葉かけをする。

7 本時の保育展開

幼児の姿	忍者の森で友達同士4・5人のグループで、かぼちゃマンごっこやカクレンジャーごっこ等をして遊んでいる。朝の当番活動では、ニワトリやヒヨコ、ウサギに餌をあげたり掃除をしたりして喜んで世話をしている姿が見られる。砂場では、川・ダム・温泉・滝を作り、友達とイメージを共有しながら遊びを進めている。室内では、病院ごっこ、幼稚園ごっこ、お家ごっこを楽しんでいる姿がある。	ねらい	友達と協力して課題解決をしながら、自然に触れる楽しさを味わう。	内容	・友達と話し合いながら課題解決をする。 ・動植物に触れて興味や関心を持つ。 ・感じたこと、考えたことを友達や教師に伝え、共感する。 ・描いたり、作ったり工夫して表現する。
生活の流れ	幼児の活動の展開	教師の援助及び配慮	教師の援助(☆) 環境の工夫(★)		
8:15 ○登園する。	◎登園 ・挨拶をする。 ・所持品の始末をする。 ・当番活動をする。	・一人一人と笑顔で挨拶を交わし、コミュニケーションをとる。 ・進んで園庭のチリ拾いや、小動物の世話、野菜や草花に水やりをしている姿を認め、見守りながら手伝ったりする。	☆表示板が読めないグループには説明をしてあげよう。 ☆木登りができるように木にロープを吊すことで全身運動ができるようにする。 ☆幼児のつぶやき、感動、気づき、発見を受け止めよう。 ☆グループからはずれる幼児には、「グループの友達心配しているんじゃない」と言葉かけをしてグループの一員としての意識に気づかせる。 ☆トラブルは様子を見て見守ったり、必要に応じて援助する。 ☆砂場に水が運べるようにバケツを準備する。 ☆葉っぱでお面が作れるようにセロテープ、輪ゴム、マジックを準備する。		
9:15 ○ホールに集合する。	・歌を歌う。 (大きな栗の木の下で・花咲山) ・たんけんごっこについて話を聞く。 ・友達5~6人でグループを作る。 ・たんけんごっこカードにメンバーの名前を書く。	・たんけんごっこカードを18枚準備する。 ・手作りの虫かご18個準備する。 ・落ち着いて説明が聞けるように歌を歌いながら雰囲気づくりをする。 ・たんけんごっこについて説明をする。 ・7つの課題を表示板で説明する。 ・安全面に気をつけるよう言葉かけをする。 ・2~3名と少ないグループは5~6名のグループになるように言葉かけをする。 ・困ったこと、わからないことは近くにいる先生に聞くように説明する。 ・課題解決をクリアした箇所は先生にシールを貼ってもらうように説明する。			
9:40 ○探検ごっこに出発する。	・たんけんごっこカードと虫取りかごをもらったグループから出発する。				
9:45 7つの課題	 環境図	 U教諭 (だんご作り) ☆成功した時の喜びを共感しよう。	 S教諭 (忍者の森) ☆幼児の様子を見ながら困っているグループには、ヒントある言葉かけをして、イメージをふくらませる。	 A教諭 (木登り) ☆木登りは安全面に気をつけながら、挑戦意欲を受け止め、一人一人の自信につなげていく。	
① にんじやのみ もりできろい ましよう。		 H教諭 (お面作り) ★テーブルを設置する。 ☆幼児一人一人に添った援助をし、完成の喜びを味わわせる。	 たんけんごっこ スタート にんじやもりで きのみを1こ ひろいましよう たからもの を1つ ひろいま しよう うさぎや にわとり とあそぼ う きよのぼり をしよう おおきいは っぱを5まいと ってください はっぱで おめんを つくらう だんご を2こ つくり ましよう ゴール ほーるに あつまる くもーどのともだちのせきえ	 K教諭 (小動物と遊ぶ) ☆ニワトリ、ウサギ、アヒルと触れ合う楽しさを味わわせる。 ☆餌をあげたり、やさしく接することを気づかせる。	
② たからもの を1つひろい ましよう。					
③ うさぎやに わとりとあそ ぼう。					
④ きよのぼり をしよう。					
⑤ おおきいは っぱを5まい とってください。					
⑥ はっぱでお めんをつくら う。					
⑦ たんご2こ つくりましょ う。					
10:40	・手や足を洗う。 ・ホールで話し合いをする。	・手を洗っている子は褒める。汚れをうまく洗えない子には洗い方を知らせる。 ・探検ごっこについて楽しかったこと、発見したこと、困ったことを話してもらう ・葉っぱで出来たお面や宝物を紹介する。	反省 評価	・自然に触れて楽しんでいたか。 ・グループの友達と協力して課題解決をしていたか。	

身近な小動物とのかかわりを通し、援助することにより心が豊かになったS男

S男は図鑑が大好きで捕った虫を調べたり、飼育したりするのが好きであるが、少しのことでカッとする。

幼児は、入園当初から7月頃まで池で、オタマジャクシやヤゴ捕りに夢中である。

かえるの卵を見つけて「石鱈みたい」「ビールみたい」といいながら、ホテイアオイをひっくり返し、オタマジャクシを捕って観察ケースに入れ観察する姿が見られる。しかし、とったまま池の側にほったらかし、教師が池に返すこともしばしばある。9月頃の様子は以下の通りであった。

幼 児 の 姿	◎ 教師の援助 ○ 教師の読みとり ☆ 願い
数名でいつものように池の周りにいる 教師「なにをしているの」	☆遊び感覚ではなく仲間（命あるもの）としてかかわってほしい。
N男「ヤゴ捕っているんだよ」 教師「小さいの捕ったらかわいそう」	☆小さいのは弱いということを知ってほしい
S男「小さくないよ、でっかいのしか捕ってないよ」 T男「S男、捕るのが上手だよ」 S男「そうだよ。僕は虫取り名人だよ」 教師「でも捕ってどうするの」 H男「部屋にもって行って飼うんだよ」 S男 大丈夫、図鑑で餌とか飼い方調べたから」	○よかった大きいのしか捕ってなくてちゃんと約束を守ってくれているんだ。 ○友達を認められるT男の育ちを感じる。 ○すごい自信だな ☆目的意識を持ってほしい ◎今までの状態を話す ○今度は本気なんだすごいね。調べたんだ。
バケツから水槽に移し替える。 ヤゴが水からでやすいように調べた知識を教え合う。	◎温かく見守ることにし飼い方の助言・手伝いをする。
S男「棒を持ってきて」 数日後、登園するなりトンボになったことに気づく。	☆トンボになったらいいな
S男「トンボになってる」 本当だ、トンボだ」と周りに数人集まる S男「いつ、トンボになったんだろう」 H子「ほんとだ」 Y子「すこし赤いよ」 A子「ここにも、殻があるよ」 N男「お家に持って帰ろう」 S男「トンボになったから逃がしてあげよう」 教師「みんなが来てから逃がしてあげようね」	○いつも、のぞいていたんだ。 だからクラスの誰よりも早く気づいたんだ。 ○羽化する瞬間が見られなくて残念だな思い思いに感じたことが言える雰囲気温かいな。 ○脱け殻も宝物なんだ ○S男の優しさがうれしい ☆みんなにも知らせてあげたいな



オタマジャクシからカエルになる変化、絵本「おしゃれなカエル」の通りになった嬉しさ、不思議さ、図鑑で調べ、飼育し、本当にヤゴが羽化しトンボになった喜び、大空に飛ばした感動を味わったと思われる。S男「捕るのが上手、すごい」と友達から認められ自信につながったと思う。「そうだよ、僕は虫取り名人だもん。」からもうかがえる。幼児一人一人を受け止め、教師や友達と感動を共感することにより自分を表現することができ豊かな心の芽生えにもなったと思う。

10月頃の様子「ザリガニつかめるようになったのに」

一学期、ザリガニの世話をH男・N男・M子がやるのをうらやましそうに見ているだけだったS男。

つかもうとするが、恐がりのS男には近づくとハサミを振り上げるザリガニをなかなかつかめない。世話はもっぱらつかめる数名の子の役目である。夏休み明け、S男がザリガニの水換え掃除をしたいと言ってきた。やってみたらと声をかける。

幼 児 の 姿	◎ 教師の援助 ○ 教師の読みとり ☆ 願い
今までザリガニを見たことがなかったのに、ハサミではさまれたら痛いだろうと恐るつかもうとするS男 H男「こんなにして背中つかめ」 H男に言われ、決心したように持ち上げる意外にも簡単に持ち上げられニコニコ嬉しそうなS男 S男「できた！持てる！はさまれなかった僕怖かったけどがんばったよ」	☆ H男、N男のようにつかめたらいいのに・・・。 ○ 「H男、N男はつかめるのに」との思いがあるようだ。でも、やっぱり怖いのかな。 ◎ 「そだよ背中をつかめばハサミ使えないからね。はさまれることないよ。」と安心させる。 ◎ 「すご～い。やったね」と一緒に喜ぶ。

よっぽど嬉しかったのだろう。毎日のように水換えをしているS男。先生に認められたことが嬉しかったのか、会う子会う子にザリガニを持ち上げて見せている。「静かにしたいときもあると思うよ。」「休憩させたら？」「そだよ」の声も耳に入りません。とうとうザリガニは死んでしまいました「S男が触りすぎたからだよ」とU子、H男にやりこめられても「違うよ。僕じゃないよ」とむきになるS男だった。11月頃の様子「ひよこに触るな」

運動会ごっこに向け苦手な縄跳び、跳び箱に挑戦したS男。リレーではクラスの仲間と力をあわせて最後まで頑張ったS男。犬とニワトリはまだ苦手と言いながらも「先生、ニワトリ小屋の鍵貸して」と友達と連れだって当番活動を頑張っているS男である。

ひよこを触っている数人の子に「ひよこに触るな。お前たち触るな。ハムスター触りすぎて死なせたじゃないか。アホー触るな。」と猛烈に抗議するS男。ザリガニを死なせてしまったことを思い出したのだろう。今でもザリガニのお墓に「トートゥしてこよう」と手を合わせ、「怪我が治りますように」とお願いしているんだよ」と友達に話しかけているS男。タイワンカブトムシの幼虫を見つけ、やさしく丁寧に関わるS男の姿が見られる。手作りの絵本では「Sのこんちゅうぎ」に大好きな昆虫の絵を描いていた。

幼稚園でおもしろい！虫取りできるし、友達といっぱい遊べるし・・・。S男の表情からうかがえる。

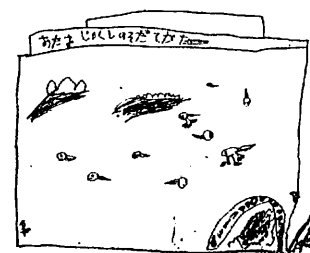
考 察

- ・身近な小動物への興味や関心が、自己充実・自己発揮へとつながり、教師や友達の認め・励ましが自信になったと思われる。
- ・池は好奇心を刺激し、幼児が進んでやってみたくなる環境と思われると共に生命にも目をむけさせる援助の大切さを再確認した。

8 保育の省察

(1)幼児が自然環境に興味や関心をもってかかわる援助から

- ・以前経験した「たんけんごっこ」で、どんな宝物を探してきたのかなと話し、宝物の紹介をすることにより、興味が増した。
- ・「たんけんごっこ」の課題を説明することにより、早く挑戦したいという気持ちが高まった。
- ・団子作りでは砂遊びの経験豊富な子は、土も混ぜていいと聞いてきたので「よく気づいたね」と幼児の思いに添った援助をした。
- ・飼育小屋では、白いうさぎと黒いうさぎが喧嘩するのを見て部屋を別々にした。それを見ていたYさんが「雄同士だから喧嘩するんだよ」とつぶやきが聞かれた。よく気づいたねと共感した。
- ・飼育小屋の水入れに水がなかったので「のどが乾いているみたいよ」と言葉かけをしたらM君が



水を汲んできてくれた。M君やさしいねと認めてあげた。

- ・子ども達が思っている「宝物」に対する認識が変わった。(バツタ、カエル、光る石、貝殻、赤い葉っぱ、黄色い葉っぱ、つるつるの石、タケノコ←実は椰子のつぼみ)
- ・グループからはずれる子と呼びにくい場面もあり仲間意識がでていた。
- ☆ 木登りや、忍者のもり、飼育小屋には振り返りができる場所がなかったのでグループで何を活動していけばいいのかわからず、とまどっているグループもあった。

(2) 自然環境の工夫から

- ・ ガジュマルの木にターザンロープを吊すことにより、ほとんどの幼児が木登りに挑戦した。
- ・ あるグループで、Mさん「こわい、木登りできない」と言うのを聞き、Y君「大丈夫だよ、このロープつかんでこっちに足をおくだろう、ほら、登れるさー、こんなして登ればできるよ。やってみー、」と親切に教えていた。言われたとおりに挑戦したMさん木登りに成功し大喜び、満足そうだった。
- ・ 木の下にテーブルを設置することにより、グループの友達と会話をしながら、お面作りが楽しく繰り広げられていた。また、お面作りはいろいろ工夫して表現していた。

(3) ティーム保育から

- ① 11月22日(金) 教師の反省をもとに検証保育の展開について全職員で考えてみた。

U教諭：幼児のグループ編成については、クラスで決められているグループの方が、スムーズにいくのかなと思っていたが、自分達で決めさせることで、ほのぼのとした話し合いの場面が見られ、グループ意識も強かったように思う。

S教諭：課題解決した後、「たんけんごっこ」のカードに何の印もないので、課題解決が終わっているのかどうか判断が難しかった。サイン(印)があれば、良かったのかなと思った。シールがあるので課題をクリアしたらシールを貼った方が良いと思う。

H教諭：宝物探しで、大きな光る石を探して持っているグループがあったが、危ないので持っている虫かごに入る宝物と気づかせる援助が必要だった。

K教諭：あるグループは「たんけんごっこ」が終わっても、なかなか集まってこなかったのも、課題解決が終わったらホールに集まるようにそのつど援助する必要があった。

② 幼児の行動の変容

- ・ ティーム保育で「たんけんごっこ」を取り上げたのは良かった。S君は普段ニワトリが苦手な担任が飼育小屋と一緒に入ろうと言っても、なかなか飼育小屋には入れない。今日はグループのT君が手を取ってあげるとすんなり小屋に入ることができたという。保育反省でK教諭からその様子を聞き、T君のやさしさを知ることができ、チーム保育の良さを実感した。
- ・ ティームを組んで保育することにより、幼児が担任だけでなく全教師に親しみをもち話しかけるようになった。
- ・ 保育反省をすることで幼児を多面的に捉えることができた。また、幼児が興味や関心が持てる自然環境の構成にもつながった。

☆ ティーム保育の事前の打ち合わせが不十分(ねらいの共通理解・役割の認識)な面もあったので次回に生かしたい。

(4) 抽出児Aさんの変容

① 一学期の姿

おとなしく自分からは話もしない子であったが、話しかけるとうなずいたり、少し微笑んで見せてくれる。自分の思いが言えなくて、困ったことがあると涙を流し両手で拭く姿があった。しかし、声を張り上げて泣くことはなかった。友達とのかかわりはなく、自分の世界に入り、ホールでスキップや側転をしたり、戦っているポーズをとったりしてホールの端から端へ移動しながら遊んでいた。戸外に出て自然とかかわって遊ぶ姿は全く見られなかった。教師は努めてかかわるようにした。

② 二学期の姿

一人遊びが多かったA君だが、クラス枠をはずしたティーム保育を試みたことにより他のクラスの友達と行動を共にしている姿が見られるようになった。戸外にも目を向けるようになったが、泥んこ

砂遊び等の活動になると、その場から立ち去り室内で一人遊びをして自己満足で終わっていた。

10月中旬より泥んこや砂遊びはまだ抵抗があるようだが友達の遊んでいる様子をのぞき込んだり、木の実を採ったり、少しずつではあるが自然に対して興味を持って遊ぶようになった。

11月27日の検証保育では、グループで活動する姿はなかったが団子作りは担任に言葉かけをされてぎこちなさそうに作っていたが喜んで参加することができた。

③ 三学期の姿

他のクラスのBさん・Cさんと気が合うようで一緒に忍者の森でかぼちゃマンごっこをしたり、木登り、バツタ捕り、ウサギ等に餌をやったりするようになった。そのようなAさんの成長を他の先生方が目にし、情報交換が職員間でかわされた。

※考察

教師が焦らず、「友達が遊んでいるのを見ているんだ」「これがA君の遊び始めるスタイルなんだ」と理解しながら援助することにより友達とのかかわりがもてた。一人の子を育てるためにクラス枠をはずし職員が他のクラスでも受け入れるようにするなど職員が一丸となって連携したことで他のクラスにも気の合う友達を見つけ楽しそうに遊ぶ姿が見られるようになった。

VI 研究の成果と今後の課題

1 成果

- (1) 自然とかかわる中で、幼児は様々な感動を味わったり、命の大切さを知ったり、思考力や表現力が培われ、友達を思いやるやさしい心が見られたことは幼児の変容から「豊かな心」の表われだと感じられる。
- (2) 生活の中に、小動物（ウサギ、ニワトリ、アヒル、カメ、ハムスター、ザリガニ 等）を飼育し、いつでも触れ合うことのできる環境を作り、共に生活する中で、小動物に対する親しみが増し、慈しみやいたわる気持ちを育てることができた。
- (3) 園庭にいろいろな食草や植物を植えることにより、いろいろな虫が寄ってくるようになった。それを捕ったり見たりする経験を通して探求心が増し、疑問に思ったことを図鑑で調べ、友達や教師に教えたり、共感したりする姿が見られるようになった。
- (4) 季節の野菜や、草花を栽培することにより、植物の生長を楽しみにしながら水やりをしたり、周りの木々や草花にも関心を持ち、遊びに取り入れたりする姿が見られるようになった。
- (5) 環境の工夫（ガジュマルのターザンロープ）をすることにより、木登りに挑戦する幼児が増えた。木の下にテーブルを設置することにより、友達とイメージを共有しながら遊ぶ姿が見られるようになった。
- (6) 全職員で幼児一人一人の内面理解に心がけて援助するチーム保育をすることにより、幼児が担任だけでなく他の教師にも親しみを持てかかわるようになった。
- (7) 年間指導計画を見直し、自然体験に関する年間計画を作成し、実践することで園内の自然環境を生かし、計画的に実践できるようになった。

2 今後の課題

- (1) 園内の自然環境を更に魅力あるものにする為に、地域や保護者の人材を活用し、幼児の豊かな心を育みたい。
- (2) 今後も、幼児理解やチーム保育に対する更なる園内研修の充実を図る。

<主な参考文献>

文 部 省	『幼稚園教育要領解説』	フレーベル館年	1999 年
高城義太郎・他	『指導計画の作成と展開例』	チャイルド本社年	1993 年
神長美津子	『保育の基本と環境の構成』	ひかりのくに年	2000 年
柴崎正行・森上史郎	『環境』	東京書籍	2000 年